



鼎談

三人熱論



岡田かつや

Katsuya Okada



高橋千秋

Chiaki Takahashi



蓮舫

Renho

「豊かで平等な社会」と言われてきた戦後日本の社会。この社会が小泉・安倍政権の6年間で大きく揺らぎ、所得・雇用・教育など格差が拡大し、日々の暮らしや将来に対する不安が広がっています。今、この格差拡大を是正し、暮らしの不安を取り除いていくことが最も重要な政治課題となっています。この夏の参院選は、民主党が「生活維新」を掲げて安倍自民政権と対決し、政権交代を目指す大きな節目となる選挙です。

いよいよ7月に迫った参院選を前に、「身近な政治」を訴え、子育てをしながら政治の舞台で活躍を続ける蓮舫さんと、地元三重県で「生活者の目線」をキャッチフレーズに現場の声を政治に活かす高橋千秋さんを迎えて、その決意を語っていただきました。

女性をめぐる さまざまな問題

■子育て、仕事との両立—女性の現状

岡田：蓮舫さんは、3年前の参議院選挙で東京選挙区で当選されました。2人のお子さんの子育てをしながら当選して、今も大活躍されているのですが、いろんなご苦労もあると思います。その辺のところから話を伺いたいと思います。

蓮舫：3年前の参議院選挙では、子どもが6歳。ちょうど小学校へ上がる時で、選挙活動ができるのかなという不安はありましたね。選挙に出ようと思ったきっかけは、与党のこれまでの子育て政策があまりにも稚拙で、本気で取り組んでこなかった結果として、出生率が下がり、子どもたちが幸せに暮らせる環境が脅かされていて、同じように子どもを持っていらっしゃる方、これから子どもを持ちたいと思っていらっしゃる方に、とても不安な時代になってきた。それならば、私は国政の場で子どもの安全を守る活動をしたいと思って、あえて立候補させていただきました。子どもを育てながら仕事をするというのは、何も政治家でなくとも、いろんな職種の方がいらっしゃいますが、夫や私たちの両親の協力がなければできないと思っています。国会が開いてる時は、朝早くから夜遅くまで外に出て、いつ帰れるかわからない状況です。勉強を見てあげると時間、食事を作るとあげる時間、一緒に遊ぶ時間、美術や科学に触れる時間など、わたしは夫とシェアしながらやっています。よほどパートナーの協力が無い限り、両立は難しいと思います。

岡田：話題が子育てになりましてので、「双子のお子さんの親」という共通点を持つ高橋さんに、子育て論を伺いましょうか。

高橋：私が初めて立候補し、そして落選したのが、ちょうど2人が6歳で1年生の時で、今中2になりました。その上に男の子がいて、子どもは3人なんですけど、先ほど蓮舫さんもお子さんの理解がないとできないという話をされましたが、仕事と家庭の両立は、お互いの協力が無いとやはり無理だなと思います。私の場合は妻が頑張ってくれていますが、子育てには悩んでいる最中ですね。子どもたちにとっては親らしいことはできてないかもしれませんが、親が一所懸命やってるところを、きっちり子どもたちに見せていくのは大切なことだと思います。

■子育て支援の政策

岡田：次に政策について話をしたいと思います。民主党の子育てに関わる政策についてですが、働きながら子育てできる社会をつくる、私も3年前の参議院選挙で子育て支援ということを訴えました。総選挙でも年金と子育てということでした。郵政民営化の問題にかき消されてしまいがちでしたが、真剣に聞いていただいた方もたくさんいらっしゃいました。街頭演説をすると、小さな子どもさんを連れた若いご夫婦が本当に熱心に関いてくれました。しかし、あれから1年半経ちますが、いまだにこの問題は進んでいません。蓮舫さん、子育て支援について、今政府に足りないところを含めて語っていただけますか。

蓮舫：まず、政府・与党と決定的に姿勢が違うのは、縦割り行政の弊害を取り除く必要を感じている点です。特に重点政策となる少子化対策は、ただ単に子どもを増やすというのではなく、お子さんを持ちたいと思ってる方が安心してお子さんを持っている環境、そこには経済支援があり、就労支援もあり、あるいは保育所や幼稚園といった施設の支援もあり、女性1人だけに子育ての負担がかかるのではなく、それを社会がどれだけ支援していけるのかということですね。それは厚生労働省だけではなく、経済産業省、国土交通省、文部科学省など複数の省庁にまたがりますから、まずは内閣府のもとに“子ども家庭省”の前身となるようなものをつくってもらいたい。最終的には、家族政策を全面的に応援する“子ども家庭省”の創設ができればと思っています。今働く方の3分の1が非



正社員で、派遣や請負とかで先の生活が見えない、結婚や子どもどころか自分の将来の青写真も描けないという辛い環境に置かれている方が多くなっています。正社員・非正社員にかかわらず同じ労働には同じ賃金を保障して、不平等な待遇を改善していくこと。これだけでも子育てをしているカップルの負担が軽減されるんじゃないかと思います。

岡田：子ども政策について高橋さんのご意見はいかがですか。

高橋：今、蓮舫さんがおっしゃったように、なぜ子どもを多く生まないのか、それはやはり経済的な不安の部分が大きいんですね。高校生くらいで一番お金がかかるというのは、皆が実感として持ってる。今すぐやるわけではないけれど、将来的なことを考えて、子どもを多く生めない。その部分の手当は考えていくべきですよ。昨日も三重県南部の漁村に行ったんですが、お年寄りばかりなんです。だって出生率で見ると都会よりい。なぜかという、世代を越えて地域ぐるみで助け合いながら子育てしてる。そういう昔の日本の良さがまだ残っているんです。出生率を高めていくには、そうしたことも大切なことだと思います。地域全体で子育てをして、行政がそこをフォローアップしていく仕組みをつくるのが大切なんじゃないかと思います。

岡田：これは地域性がありますよね。三重県の中でも、地域としてのコミュニティがしっかりしているところとそうでないところがあります。都市部であっても学校単位で放課後スクールとかNPO活動とか、多様な子育て支援、取り組みは考えていかなければいけないですね。今、安倍総理のもとで政府も子育て支援策を論議していますが、ここ10年ぐらいの間に「エンゼルプラン」「新エンゼルプラン」「子ども・子育て応援プラン」とずっとプランが出てきてますが、単に先送りのために議論しているのじゃないかと思いませんか。真剣に取り組もうという姿勢が全く見えてこないですね。

社会保障・格差、暮らしに直結する政治

■安心して暮らせる生活を支援する政策

岡田：さて、子育て支援だけでなく、生活者にとって社会保障の問題も大きいですが、高橋さんはどう思われますか。

高橋：僕はいろんなところで高齢化と医療・年金の話をしてますが、三重県は北と南で高齢化率が違うんです。南へ行くほど高齢化率が高い。年金の問題は関心が高いんですね。農業や漁業、自営業の方が多くて、年金も国民年金が農業者年金なんです。収入が少ない、年金も8万円ぐらいの金額で将来生活できるのか。その意味でも、一般サラリーマンよりもっと不安を抱えている。国民年金の基本的な部分をどうしていくのか。どうやって行政がカバーしてやっていけるのか、そこを考える必要があるのかなと思います。年金の基礎的な部分について、絶対安心なんだよってことを国民に示すことが大事ではないかと思います。

蓮舫：与党がずるいと思うのは、「年金100年安心プラン」とか「郵

政民営化」とか、これまでの政策を見ていて、キャッチコピーはすぐ耳に聞こえがいいんですよ。でも、実際に改正されて生活に影響が出てくると、すごく痛みが大きいんですよ。痛みが大きすぎて耐えられない方も出てきている。年金だけでは生活できない不安と、身体が動かなくなった時に介護を受けられないという不安が大きいんです。来年から70歳以上の医療費負担が1割から2割になる。私たちは、これから先、お金を持つてると持っていない人の格差がどんどん広がっていくのを何としても直していかなければいけないんです。だから、次の参議院選挙がとても大切だと思っています。私たちは国民年金と厚生年金、共済年金を一本化すると考えてきてるんですが、どうやって実現させるのかという具体的なタイムスケジュールを示す必要があると思います。

岡田：与党は厚生年金と共済年金を一本化したら年金改革は終わりと言わんばかりです。しかし、年金制度は抜本改革が必要不可欠なんです。去年安倍総理は、国民年金の加入者は自営業者なんだから、資産があり、定年がないと言っていた。昔は確かにそう言われていた時代があったかもしれませんが、そういう自営業の方を前提にしているなら最低限の保障でいいだろうと。しかし、今の国民年金加入者は自営業者以外にも増えてきているし、自営業の方にとってもいい時代ではないんですよ。格差論争でも安倍さんは、経済成長率を高くすれば、格差問題は解決すると言う。しかし、現実には経済成長しても格差が縮小するという時代ではありません。安部さんは、それが全くわかっていないと思います。

蓮舫：経済成長が期待できるとすることで楽観的な見通しを立てるのは簡単なんですけど、テロとか大震災とか、何らかの想定できない事態が起きた時に、経済が一気にダウンする。社会保障だけではそういう痛手を被ってはいけないという前提で100年の設計を描かなければいけないのに、楽観的な見通しで社会保障を組み立てているところに大きな問題があると思います。私には今の政府は現実を見てないのじゃないかと思いませんか。

高橋：岡田さんが代表だった3年前に参議院選挙で年金問題で民主党は勝ったんですよ。でも、あの時から何も変わってない。年金問題は解決しているわけではないんですよ。

「身近な政治」が争点となる この夏の参議院選挙。

■「生活維新」をアピールして安倍政権と対決！

岡田：さて、いよいよ夏の参議院選挙が近々ってきました。この夏の参議院選挙で何を訴えていきますか。

蓮舫：「身近な政治」に尽きると 생각합니다。本来、政治は身近なものなんです。子どもを生み育てることや働くこと、安心して老後を迎えることも全部政治で、でも残念ながら今まで政治は遠かった。だから政治に期待をしても失望感しかなかった。そういう経験が重なって無党派の方が広がってるんだと思う

ですけど、無党派とか無関心では政治は変わらないんです。政治は身近だということを知りやすく、明確にアピールしていくべきだと思います。

高橋：私のキャッチフレーズは“生活者の目線”ということですよ。この参議院選挙を通じて、生活者の目線を持った、生活に根付いた政策を、誰が、どの党が真剣に取り組んでいるのかを国民の皆さんに知ってもらうことが大切だと思います。

岡田：年金にしても農業の問題にしても、今までの政策の失敗が重なって現状がある。将来に確信が持てない、若い人が後を継がない、それは政策の結果なんです。政策を変えることで、もっといい社会が実現するんだということを伝えていかなければいけないですね。

高橋さんは参議院の若手議員の中で大変人気があり、兄貴分として頼りにされています。そして、私も驚くほどよく地元へ帰って、県内をあちこち飛び回っています。地域を大切にしているなと思います。蓮舫さんから見て、参議院議員の高橋さんってどんな存在ですか。

蓮舫：参議院議員は地域の代表だと思うんですよ。全県を代表して国政に声を届けるわけですから。高橋さんは、本当に地元に根付いた生きている政策を訴える人なんですよ。私は東京なんですけど、三重の人たちが望んでおられる政策と東京の人たちが望んでおられる政策は違うんですが、その中から共通のものを見出し、参議院の声として訴えていくことができます。そんな時の火付け役と言いますか、リアルな声をボツと発火させる、とても頼もしい存在ですね。(笑)

岡田：高橋さん、この夏の参議院選挙へ向けての決意を語ってください。

高橋：6年前を思えば、小泉旋風の時で、大変厳しい状況でした。この6年間、私が頑張ってきたこと、県民の皆さんにしっかり見ていただいていると思っています。ここで負けるわけにはいきません。この関門を乗り越えて、次の6年も頑張りたいと思います。これが次の総選挙の前の大きな山場だと思っていますので、必ず勝たないといけない選挙だと思っています。三重で負けたら他の県でも勝てません。プレッシャーもきついですけど、負けないように頑張ります。

岡田：政権交代を実現するためにも重要な選挙です。政治家は、選挙のために悪くなるタイプと磨かれていくタイプがあります。高橋さんは、今度4回目の選挙ですね。選挙のたびにたくましくなっています。是非頑張ってください。ありがとうございました。



プロフィール

◆高橋千秋(たかはし・ちあき) <http://www.chiaki.gr.jp/>
1956年生まれ、50歳。2000年の参議院三重選挙区補選で初当選し、翌年の参議院で再選、現在2期目。「生活者宣言」を掲げて、生活者の目線に立った政治を目指し、地元で密着した活動が続いている。蓮舫さんと同じく、双子の父親として夫人と共に子育てにも奮闘中。現在、民主党政調副会長、三重県連代表。

◆蓮舫(れんほう) <http://www.renho.jp/>
1967年生まれ、39歳。1988年芸能界にデビュー、キャスターなど幅広い分野で活躍。2004年の参院選に東京選挙区から立候補し、初当選を果たす。双子の子育てをしながら「母親として子どもたちを守り育てる」を信条として活動が続いている。現在、参院文教科学委員会、少子高齢社会に関する調査会などに所属。民主党ネクスト文部科学副大臣。